

19世紀前半のカレン・バプテスト宣教による影響の一考察 ——文字文化と信仰の不可分な関係——

藤 村 瞳*

A Study on the Impact of Introducing Literacy through the Baptist Mission: The Inseparability of Religion and Literacy in the Karen World

FUJIMURA Hitomi*

Abstract

While Protestantism brought modernity to indigenous peoples, it sometimes created new types of confusion in local society. Previous literature on the Karen Baptist mission in nineteenth-century Burma tended to focus on missionaries' devising Karen scripts and orthographies, depicting this as the major modern influence of Christianity on Karen speakers. Yet, it is also essential to examine how the invented orthography and printed materials were utilized by Karen evangelists in their oral preaching, in order to understand the vast influence of literacy in the Protestant mission more holistically.

Analyzing various historical sources in Sgaw Karen from the 1840s, this paper reveals how a set of the Christianized Sgaw Karen vocabulary and expressions was created along with the Bible translation. This new Karen lexicon, heavily reflecting the Christian worldview, was used by Karen evangelists in their preaching. The use of the new Karen lexicon meant that incomprehensible literacy and narration emerged in the Karen world, generating a lexical gap between the converted and non-Christians. That the new incomprehensible narration was pivotal in the mission to preach God's word suggests that modern Karen literacy, despite its modernity, emerged in the Karen world as something inseparable from a particular religion, that is, Christianity.

Keywords: Karen literacy, Protestant mission, religion and literacy, Karen Baptist history

キーワード：カレン文字文化, プロテスタンティズム, 宗教と識字, カレン・バプテスト史

* 上智大学大学院グローバルスタディーズ研究科 特別研究員；Graduate School of Global Studies, Sophia University, 7-1 Kioicho, Chiyoda-ku, Tokyo 102-8554, Japan
e-mail: hitomifujimura@gmail.com
DOI: 10.20495/tak.57.2_136

I はじめに

本稿は、1840年代のビルマ¹⁾でのカレン語話者²⁾へのバプテスト宣教を事例に、プロテスタンティズムによる文字文化導入の諸影響を検討するものである。19世紀以降アジアでの教勢を拡大させた米国バプテスト派は、最初の海外伝道を1813年にビルマで開始した。キリスト教に関心を示したカレン語話者が固有の文字を持たなかったため、渡緬したアメリカ人宣教師たちは聖書翻訳のためにまず文字と正書法の考案に着手した。聖書翻訳と同時に印刷事業もすすみ、小冊子や聖書が伝道の際に用いられた。米国バプテスト派の活動は、口伝に依ってきたカレン語世界への文字文化導入の契機の一つとなった。

本稿ではスゴー・カレン語史料を分析し、キリスト教語彙体系が文字創案と聖書翻訳をつうじて誕生し、伝道場で用いられたことを明示する。この新たな語彙体系は伝道場面での語りを固定化させたが、そこで成立した語りは聴衆にとって理解不可能なものであった。さらに、プロテスタント宣教の一環として誕生した文字文化が、カレン語世界では聖性を帯びるものとして、信仰と不可分に受容されていったと展望する。

II 先行研究に対する位置づけと依拠史料

II-1 先行研究における位置づけと問題点

19世紀前半のカレン・バプテスト宣教は、ファンデルフェールが「近代性への改宗」と呼んだ近代プロテスタンティズムの特徴を有している [Van der Veer 1996]。プロテスタント諸派による宣教は、共同体との繋がりが強かった信仰を個人に内在化するという過程であった。古典的宗教共同体では、神と契約を結ぶ改宗の場面でも帰属集団など社会的関係が重視されたが、プロテスタンティズムでは個人の意志に基づく改宗や信徒自身による聖書理解に重点が置かれた。信徒一人ひとりが神の言葉を心から理解する主体性に価値が見いだされた。特定の言語の聖性や宗教的権威は否定され、聖書は土着語による平易な文体で著されていった。海外宣教では、各地域語への聖書翻訳が精力的に取り組まれた。このような伝道方式は活版印刷技術を活用することで、近代的展開をみせた。

インドネシアのスンバで調査したキーンは、オランダ・カルヴァン派の宣教がもたらした近

-
- 1) 本稿では地域名称はビルマ、主要言語はビルマ語と表記する。各地名はイギリス植民地期の英語表記に準ずる。
 - 2) 東南アジア大陸部のカレン系言語を母語とする集団。ビルマ南部からデルタ地域、タイ北部に至るまで広範囲に居住する。タイでは山岳民族として知られるが、ビルマ側では低地に暮らす者も多い。カレン諸語のなかではスゴー・カレン語とポー・カレン語が二大サブグループで、その他にプエ、パター、モーネイ、モウボワなどがある。

代的諸観念の諸影響を批判的に論じた [Keane 2007: 13-14]。改宗や聖書翻訳、そして新たな宗教儀礼などをおして、近代的価値観が正しい倫理観としてスンバのマラブ³⁾ 改宗者に内面化されていった。キーンが描出したのは、宣教初期には土着の信仰や宗教観の文脈に沿ったかたちでキリスト教が受容されても、伝道活動や信仰実践をつうじて次第に近代的道徳観や認識準拠枠が言語という記号を介して内面化され、人々の思考の在り方を不可逆的に外延づけていく様であった。現代のスンバでは、近代的価値観を内面化させたキリスト教信徒が土着の祖霊信仰を「拝物的」と否定し、祖霊信仰者との間で概念的衝突が生じている [ibid.: 102-103]。

キーンの議論の秀逸な点は、西洋的道徳観を良い指標とする価値判断を内在させる近代性の本質を批判し、スンバ社会の実態が近代性の自己矛盾と不完全性を逆照射していると指摘したことである。本稿ではキーンの議論を参考に、近代性を内包するプロテスタント宣教がその理念に逆行する動態をいかに生み出していたのか、カレンの事例から検証する。

東南アジア大陸部における近代宣教の影響として盛んに論じられてきたのが、文字および正書法の確立である。カレン宣教は、その先駆の事例である。特に注目されてきたのが、宣教師による文字考案が伝承になぞらえて理解され、それが東南アジア大陸部少数派の改宗動機となった点である。

固有の文字を持たない人びとの間には、神から与えられた書を喪失したことでかつての繁栄も同時に失われ現在は苦境に陥っているという語りが存在してきた。これは「失われた本⁴⁾」の伝承」として知られる。カレンの他にも、ラフ [片岡 1998; 西本 2000] やフモン [Tapp 1989; Ngo 2016] で類似した語りが見られ、伝承の細部は地域ごとに異なる。⁵⁾

カレンの伝承に関しても、様々なバリエーションが記録されてきた。なかでも、宣教師マーシャルによる「ユワ (永遠なる神)」に関する記述はその代表的例である。

ユワには7人の子供がおり、長子はカレンで、最年少は白い人であった。父は旅に出かけようとした際、カレンについてくるようにいった。しかし、カレンは農地を耕さなければならぬことを理由に断った。ビルマ人も断った。ユワはそれぞれに贈り物を与えた。カレンには竹の桶、ビルマ人にはへらを与えた。白い弟が父について海に出ると、桶は小舟に、へらはマストと帆になった。

3) インドネシアのスンバ島に暮らす祖先・祖霊信仰およびその信仰者を指す。

4) 本稿が扱うスゴー・カレン語のように、「文字」という語は文脈によっては「本」を意味する場合がある。よって、人びとが失ったものは「本」であり「文字」でもあったと両義的に解釈できる。表記の煩雑さを避けるため、本稿では「失われた本」伝承と記す。

5) キーンも、過去に所有していた本を喪失したことで周辺の民族より社会的劣位にあるという伝承がマラブの人びとの間にも存在すると述べている [Keane 2007: 160]。しかし、マラブ信者の場合は、本を参照せずに過去や祖先との繋がりを語る点ができる点をむしろ強調し、本がないことはキリスト教への対抗言説となっている。

ユワは3冊の本を用意し、銀と金の本を長兄であるカレンに、ビルマ人には貝葉を、そして白い弟には羊皮紙を準備し、白い弟にこれらを渡した。しかし、彼（白い弟 [筆者注]）は銀と金の本を手元に残し、羊皮紙をビルマ人経由でカレンに送った。カレンはその時、畑の耕作で忙しく、本に注意を払わず持ち帰るのを忘れてしまった。畑に火を入れるときに木株の上に置いたままであったので、ほとんど焼けてしまった。豚と鶏がその残りをついばんでしまい、本に収められた知識は失われてしまった。[Marshall 1922: 279–280]

上記には、「ユワ（神）」、「白い兄弟（人）」、そして「本の喪失」などのモチーフが登場する。これと類似する内容を「カレンの伝承」として最初に紹介したのは、宣教師メイソン（Francis Mason: 1799–1874）であろう。メイソンは1831年から40年近くカレン宣教に従事したアメリカ人宣教師で、聖書をスゴー・カレン語に翻訳した人物である。彼は、1833年12月6日にメルギー長官宛へ手紙を送付し、「民族としてのカレンの伝承」と題して次のように紹介した。

子供たち、孫たちよ！ 以前、神はカレン民族を誰よりも愛していた。しかし、彼らが神の命に背いたため、その背いた行為の結果、我々は現在苦しんでいる。神が我々を呪ったので、我々は現在のような苦境にあり、本を持たない。しかし、神は再び慈悲を示し、再び我々を何よりも愛してくれる。神は再び我々を救ってくれる。我々が悪魔の言葉に耳を傾けるため、我々は苦しむのだ。[BMM 1834: 389]⁶⁾

この手紙は、カレンをヘブライ起源の宗教につらなる旧約の民と描出することを意図して執筆され、メイソンのこの理解は20世紀まで続くカレン民族像の素地となった[池田 2012: 237–235]。上記のマーシャルも含め、後代のアメリカ人宣教師やイギリス人行政官の多くが、これに準じて「カレンの伝統」を記してきた[Smeaton 1887; Marshall 1922]。

「失われた本」伝承は、苦しい現況からの脱出を待望する一種の救済思想であり、本の回復は救済の兆候とみなされる。この救済思想とキリスト教宣教団による文字の考案を結び付け、それをすなわち伝承の成就と捉えた者たちが現れた。キリスト教と文字の到来が在地の信仰や世界観と接合した具体相は、様々な事例をとおして分析されてきた[Hovemyr 1989; Keyes 1993; 1996; Stern 1968; Tapp 1989; 片岡 1998; 2003; 2007; 西本 2000]。

なかでもスターンは、カレンの救済思想がキリスト教改宗者とタラコン信仰者⁷⁾の場合で異

6) この内容は、米国バプテスト派の機関誌『バプテスト宣教雑誌 (*Baptist Missionary Magazine* : 以下、BMMと略記)]に掲載されたことで、広く周知されていた。

7) インドラ信仰と仏教、さらにカレンの精霊崇拜が混交した信仰。実践を重んじながら未来仏アーリヤの到来を待つという特徴がある。その起源は19世紀後半1860年代にまで遡るとされる[Stern 1968; 速水 2011: 290–292]。

なる信仰と接合したことに注目し、その条件の違いを政治社会的状況から説明した [Stern 1968]。カレン語話者の間では救済思想と千年王国運動の盛り上がりは歴史的に度々生じており、時代ごとに救済の文脈は異なった。第一次英緬戦争（1824-26年）によってビルマ王朝のテナセリム支配が終結し、ほぼ同時期にアメリカ人宣教による活動が始まった。このことが、同地のカレン語話者にビルマ王という支配者からの解放と苦境からの脱出を予感させた。この時期の宣教師による文字の考案は、白い兄弟がカレンの本を持って帰ってきたと理解され集団改宗が起こった。対照的に、1860年代以降のタラコン信者にとって西洋人は支配者という存在であり、救済者ともはやみなせなくなっていた。さらに、宣教団と聖書はタラコンが希求する救済の道を示さない「悪い信仰」とみなされ、受容はすすまなかった [ibid.: 317-318, 325-326]。

ラフ宣教を取り上げた片岡は、伝承と改宗の接合における文字の呪性・秘儀性の作用を強調する [片岡 1998]。失われた本の回復という語りの要点は、民族固有の文字の有無ではなく、文字それ自体が持つ呪的・秘儀的な「力」であり、それを獲得できるという点にある [同上論文: 162-163]。このことから、片岡は無文字社会における「識字力」という概念を、単純な読み書き能力に限定せず呪的・秘儀的書物の所有も含むと広義に定義づけている [同所]。

文字の所有と識字がなんらかの力を象徴することは、1840年代のカレン語話者による文字認識にも窺える。スゴー・カレン語で「文字」を意味する「リ (ဝိဒ်/ lee)」という語は、『カレン知識の辞典』⁸⁾では「王を戴く人びとにはそれぞれ文字がある。王がいない人びとは自身の文字を持っていない」と説明されている [Kau Too and Wade 1850: 104]。支配者の存在と文字の有無との関連付けからは、文字の所有がすなわち力の有無と同一視されていたと考えられる。

文字考案と改宗動機の関連は、東南アジア大陸部マイノリティに普遍的にみられる現象である。キリスト教布教という海外宣教本来の目的を達成している点でも口承と改宗の接合の諸相は検討すべき課題である。しかし、これまでは文字の創案という事象に議論の比重が置かれてきた。一方、文字の創案以降の書物の活用や、識字能力を持った伝道師らの活動の影響が十分論じられてきたとはいえない。

文字創案以降の動態について、カレン語印刷物の出版と流通過程に着目したウォーマックの視座は示唆的である [Womack 2005]。宣教師が考案したスゴーやポーの正書法だけでなく、ポー・カレン仏教僧によって発案された正書法も含め、ウォーマックは諸種のカレン語出版物を網羅的に整理し検討した。これをつうじて、バプテスト宣教団による文字創案を契機に、キリスト教スゴー・カレン文字、キリスト教ポー・カレン文字、仏教ポー・カレン文字、レーケー文字など多様なカレン文字と正書法が誕生し併存する過程が明らかにされた。異なる文字

8) 同書の書誌情報については後述する。

文化の誕生と印刷物の流通はカレン諸語間の境界を鮮明化し、複数のカレン識字ネットワークを形成していった [ibid.: 19]。

ウォーマックによるカレン語印刷物と識字ネットワーク形成への着眼は、文字創案以降のカレン語世界におけるリテラシー状況を論点化した点で評価できる。ただし、正書を軸とするネットワークのみに焦点を絞ったことで、口伝である説教を含む伝道活動への視点は依然として抜け落ちたままである。⁹⁾「語る」ことは、先在する物語の源泉を二次的に再現、再演するという特徴を持つ [坂井 2004: 178]。書物や記録の内容を声に出して読み再現することで聴衆と共有する行為は、文字文化が優位となっても廃れるわけではない。むしろ宣教の文脈に置き換えると、聖書の内容を説教や礼拝の場で朗読し聴衆に伝えることは重要な伝道活動である。加えて、19世紀前半当時のカレン識字者はごく少数であり、主たるコミュニケーション法は依然として口伝であったと推察されるため、伝道における語りに注目する必要がある。

さらに、ウォーマック自身も指摘するように、各カレン正書法の成り立ちが宗教コミュニティと密接に関連する点も文字文化の拡大過程の大きな特徴である。同一言語であっても宗教コミュニティごとに異なる文字と正書法が成立した場合もある。このことは、文字文化が信仰と表裏一体となってカレン語話者の間で広まっていたことを示唆する。文字と書物は、宗教実践の場では単に読み物としてだけでなく、儀礼に欠かせない道具としても重要な役割を果たしてきた [Cannell 2006: 146]。文字を朗誦する行為が霊的な効力を持つと聴衆から認識されれば、その語りも宗教的空間を生み出す一要素となりえる。本稿では、文字文化が特定の聖典とともにカレン語世界にもたらされていった同時代性を重視する。

19世紀前半の宣教におけるカレン伝道師の活動の重要性は、タイとビルマのカレンを横断的に研究する速水も論じている [速水 2002; Hayami 2018]。アメリカ人宣教師の活動ばかりに歴史的関心が払われてきたが、カレン司牧者らが行った説教や発話が聴衆の生活や世界観と上手く共鳴したために改宗がすすんだと速水は指摘する [Hayami 2018: 274]。以上全てを踏まえると、カレン信徒による語りと文字文化の関連を踏まえて考察を行う必要がある。既存の研究では、カレン語での説教内容や文字・書物への言及の在り方について具体的な分析はすすめられてこなかった。

上記の点を解決するために、本稿では伝道において参照された語彙や表現に着目する。よって、聖書翻訳過程と訳語の意味変容を分析し、キリスト教的概念の訳語とタガログ語語彙の間での意味的齟齬を明らかにしたラファエル [Rafael 1993]¹⁰⁾の視点も参考とする。以下では、

9) こうしたオラリティとリテラシーの相互影響について、梶丸 [2018] がこれまでの議論とそれを超えるための研究展望をまとめている。

10) ラファエルの議論の核心は、その齟齬が生み出した領域が、改宗者が支配者側の言説に包摂されることなく、独自の世界観を維持する空間として機能したという点である。

聖書翻訳をつうじて新たなスゴー・カレン語彙体系が創出され、伝道活動によってキリスト教的語彙体系が運用されていった一連の流れを提示する。カレン司牧者らによる伝道がすすむなかで、「失われた本」伝承も画一的なキリスト教的スゴー・カレン語彙体系によって語り直されていくこととなった。そのうえで、聞き手が理解できない語りが伝道においてなされたことの意味について考察を試みる。

II-2 依拠史料

本稿で用いるのは、1840年代のスゴー・カレン語史料である。スゴー・カレン語での印刷・出版は1830年代から開始され、1840年代には正書法を習得したカレン司牧者による記述も登場する。彼らの執筆記事は、宣教新聞『モーニングスター (*The Morning Star/ Hsà Tqo Gāv* (ဆၢတၢ်ဂၢၢ်ဂၢၢ်))¹¹⁾』¹²⁾に掲載され、伝道の現場での経験を詳細に伝えている [Hayami 2018: 255]。同新聞は、カレン改宗者の関与や自己主張が見いだせる最初期の文献として史料的価値が高い [池田 2012: 221-220]。史料としての『モーニングスター』は、速水 [Hayami 2018] やホヴェミール [Hovemyr 1989] が1890～1900年代の掲載記事を部分的に分析したのみである。初期のカレン改宗に焦点を定める本稿では、1840年代発刊分の『モーニングスター』の記事と、スゴー・カレン正書法を学んだカレン信徒らによる記述が大部分を構成する『カレン知識の辞典 (*Thesaurus of Karen Knowledge*)』を同時代史料として扱う。

『モーニングスター』は、各地のカレン信徒と宣教師間の連携を促すために、1842年に創刊された月刊スゴー・カレン語宣教新聞である。1840年代には毎月300～340部が発行された。創刊当初は創刊者メイソンの寄稿が紙面の大部分を埋めたが、1843年10月からは改宗者の手紙や伝道記録が掲載され始める [HTG 1843: 65-68]。その後数年の内に、カレン伝道師の執筆記事が紙面の4割から6割を埋めるようになった。¹³⁾ それらの大半は、モールメインやタヴォイに暮らしたアメリカ人宣教師宛ての手紙や宣教活動報告である。伝道の行程や説教、聴衆との会話などが記された他、「間違った信仰」としてではあるが靈魂に呼びかける長老の言葉や宗教指導者の祈祷の様子も含まれている。これらの内容を精査することで、当時の非キリスト教徒による神や霊的存在の捉え方も窺い知ることができる。

ただし、これらの歴史史料から当時の発話や口頭での語りの全容を解明できるわけではなく、史料的限界がある。しかし、本稿で扱う史料群に限っていえば、書き著された内容は実際の発話に限りなく近いものと推測される。元々文字が存在しなかったカレン諸語が文字化さ

11) スゴー・カレン文字のラテン文字表記の転写法について、本稿ではMason [1846] およびドラム出版グループ発行のスゴー・カレン語-英語転写法に依拠する。

12) 以下、同史料を引用する際はHTGと略記。

13) 1843年から49年までの発行分のうち現在確認できる掲載記事の総数は、306タイトルに及ぶ。このうちカレン改宗者によって執筆されたと明確に判断できるものは、164の記事である。

れたとき、正書法の大部分は当時話されていた言葉や表現を基に成立したと考えられるためである。正書法成立から間もない1840年代という時代性に鑑みても、いわゆる文語体が確立していたとは考えにくい。

記事の執筆者については、記事末尾の署名あるいは文章中の自称から判別した。署名がない場合や史料の損壊によって判読不可能なものを除くと、タヴォイやモールメイン周辺で活動したスゴー・カレン伝道師18名、バセインやラングーンの伝道師5名の名前がみえる。筆記能力を有したカレン信徒は、当時テナセリム地域に集中していたといえる。¹⁴⁾ よって同地域に関する記事は分量的にも多く、1840年代掲載分の約半数を占めた。

第二の史料は、1840年代に編纂された『カレン知識の辞典』である。同書は、スゴー・カレン語語彙を多彩な例とともにスゴー・カレン語で説明した4巻本の大作であり、1847年から1年毎に1巻発行された。これほどの大量の語彙を網羅的に解説したカレン語辞典は、現代においてもこの書以外に存在しない。

『カレン知識の辞典』序言によると、カレン信徒チェッティンの助力を得た宣教師ウェイド (Jonathan Wade: 1798–1872) が、ビルマ語辞書を参考に編纂作業を開始した。カレン伝道師パンラーが改訂作業に加わり、他の宣教師やカレン伝道師らが収集したスゴー・カレン語語彙も追記された。その後、共著者コートゥー¹⁵⁾ が用例や修正を加筆し、ウェイド監修の下で完成した。ただし、同書が編纂された1840年代にウェイドは体調を崩しており、大半の内容はコートゥーの労力によるものと考えられている [池田 2012: 232]。

そして同書の内容は、カレン信徒らの理解に基づいたカレン語語彙の意味と用例を収録したものだ判断できる。後述するとおり、「神」¹⁶⁾ や「悪魔」と訳出されたスゴー・カレン語語彙は、異なる意味や用法で説明された。さらに特筆すべきは、同書に所収された140の口承であり、カサユワや本などのモチーフが登場するものも含まれる [Kau Too and Wade 1849: 183–185]。これらの口承も、宣教師らが記録してきた「失われた本」伝承とは異なる。『モーニングスター』という媒体がキリスト教の正しさを説くという伝道的制約を強くうけたのに対し、『カレン知識の辞典』はキリスト教的世界観から比較的自由であったといえる。キリスト教の埒外の著述が散見される理由として、執筆に関与したカレン信徒たちが同書の編纂作業を伝道活動の一環と認識していなかった可能性が考えられる。

上記史料の他、米国バプテスト派機関紙『バプテスト宣教雑誌』も参照する。カレン文字考

14) この理由として、宣教師らがテナセリム地域に暮らしたことや、宣教学校など正書法を学ぶ環境が同地域で整っていたことが想定される。

15) 出自や経歴は不明だが、テナセリム地域で活動した伝道師である。タヴォイとメルギーの間に位置したパソーウー村で1854年1月に伝道した際の記録が残されている [HTG 1854: 43–44]。

16) 本稿では、訳語や文法上の単語として言及する際にカギカッコを用いる。カギカッコがつかない場合は、その概念あるいは存在に言及していることを意味する。

案や聖書翻訳に携わった宣教師らのスゴー・カレン語理解の様子を把握するため、1840年代に刊行されたスゴー・カレン語彙録や辞書類も活用する。¹⁷⁾

III 米国バプテスト派によるカレン宣教と文字の創案

III-1 バプテスト・カレン宣教の始まり

米国バプテスト派によるビルマ宣教は、1813年のジャドソン夫妻の来緬を嚆矢とする。大衆への福音伝道を掲げたジャドソン夫妻は、当初はビルマ語話者への伝道の準備をすすめた。1817年ごろにはビルマ語教理問答集や小冊子の配布も始まった。¹⁸⁾

カレン語話者への宣教は、第一次英緬戦争終結後に本格化した。米国バプテスト宣教団は、イギリス領となったラカインとテナセリム地域へ拠点を移し、アマースト、モールメイン、タヴォイに宣教支部を設置した。1827年にはボードマン (George D. Boardman: 1801-1831) がカレン宣教専任宣教師としてビルマに着任し、タヴォイ宣教支部を担当した。同地では、1828年5月16日に、タービュ (Thah Byu: 1778-1840) がボードマンの司式によってカレン語話者として初めて受浸した。¹⁹⁾

その後もタヴォイを中心にカレン語話者の集団改宗が起こった。この時期の改宗者の一人が、クワラというスゴー・カレン信徒である。クワラはタービュの説教をきいて改宗を志し、タヴォイにて1830年12月に受浸した。その後、メイソンの手ほどきで聖書やカレン語を学びモールメインのバプテスト学校で教育をうけた [BMM 1843: 179]。1842年からはタヴォイとメルギーの間に位置するピーチャ村の専任伝道師となり、1847年4月28日に按手を領した。その後も周辺地域での伝道活動を率いた。

III-2 テナセリムとデルタ地域で拡大するカレン宣教

1830年代後半からは、デルタ地域でも伝道が展開した。²⁰⁾ カレン宣教専任のアメリカ人宣教師がバセインやラングーン周辺を訪れ、カレン語話者へ授浸した。しかし、当時コンバウン王

17) 具体的には、メイソンが著した『カレン語の文法梗概 (Synopsis of a Grammar of the Karen Language)』という文法書 [Mason 1846] と、ウェイドが編纂した1849年出版の『スゴー・カレン語彙 (A Vocabulary of the Sgau Karen Language)』というスゴー・カレン語-英語辞書である [Wade 1849]。『カレン語の文法梗概』は、スゴー・カレン語とポー・カレン語の文法解説書で、巻末にはそれぞれの語録が付された。

18) 1819年にはソウがビルマ人初の改宗者として受浸した。

19) タービュの生涯と、宣教師メイソンによるタービュの伝記執筆の意図については、拙稿 [藤村 2015] を参照されたい。

20) 宣教師シモンズが、1835年にバセイン近郊の村に初めて来訪している。その後1837年12月11日に、アボットが同じ村を訪れた [BMM1844: 199-201]。

朝支配下にあった同地域に西洋人は滞留できず、宣教師たちは英領地ラカインのサンドウエイにデルタ宣教の拠点を置いた。

こうした状況下では、カレン伝道師や牧師たちが活動の担い手となった。特に、ミヤッチョーとトウェポーというバセイン出身のスゴー・カレン伝道師2名の働きが顕著であった。ミヤッチョーは、サンドウエイにて3年間キリスト教について学び、1842年12月の按手礼にて牧師となった [BMM 1844: 4]。トウェポーもミヤッチョーと同時に按手を受け、ボウミー村の専任牧師として働き、一回の伝道旅行で100名を超える者に授浸した [ibid.: 6; HTG 1846: 181-182]。デルタ地域での信徒数の増加は著しく、1841年時点の受浸者数は398名のみであったが [BMM 1842: 168-172]、そのわずか6年後の1847年にはラングーンで1,000名を超え、バセイン周辺では3,578名に達した [BMM 1848: 264]。一方のテナセリム地域の1847年の受浸者数は1,481名に留まっており、当時のデルタ宣教の勢いが窺える。

III-3 書物の希求とスゴー・カレン文字の創案

1820年代後半から1830年代初頭にかけて、スゴー・カレン文字が考案された。アメリカ人宣教師らは、カレン語話者の文字あるいは本への強い関心を目の当たりにすることで、文字創出に取り組むようになった。ボードマンは1828年9月7日付の日誌にて、自宅周辺に集ったカレン語話者の様子を記している。彼らのなかには、自らが信奉している本を携えてやってきたというカレン預言者がいた。その預言者は、「私たちカレンは、無知な集団です。本もなく、文字もなく、神やその法について何も知りません。この本を渡されたとき、これを崇拜するようにと課され、12年間実践してきました。しかし、私たちはこの内容について、これがどの言葉で書かれているのかすら知りません。イエス・キリストの福音のことを聞きその真理に納得したので、この本が福音を含んでいるのか知りたいのです」とボードマンに伝え、籠から包みを取り出しその本を渡したという [BMM 1830: 22]。四六判サイズのこの本は、オックスフォードで発行された『讚美歌付き聖公会祈祷書』であった。ボードマンは、「これは良い本だと私はいった。しかし、これを崇拜するのは良いことではない。この本が指し示す神に祈らなければならぬ」と返答した」と記している [ibid.]。この預言者は、この本を信仰した恩恵は何もないと知るとひどく落胆した [ibid.]。

ほぼ時を同じくして、ウェイドも「失われた本」の伝承に遭遇している。ウェイド自身による手記『ビルマでのカレン宣教の最初の20年——1828-48 (The First Twenty Years of the Mission to the Karens of Burma: 1828-48)』²¹⁾には、ある村の長老が「遠い昔にカレンは神から与えられた文字を持っていた。しかし、カレンは無関心でその本を紛失してしまった。文字の

21) この手記は、複写版が米国バプテスト歴史協会文書館に所蔵されるのみである。

喪失により、カレンは統治する王も王朝もなく、奴隷や犬のように扱われる。しかし、いつか白い人が神の本を携えてカレンの元を訪れる。そうすれば、再びカレンは繁栄する。よって我々は本が欲しい。その本を私たちにください」と話したと記されている [Wade n.d.: 14]。ウェイドが長老に「神の本²²⁾を持っているが、これはカレンの言葉で書かれていない。カレンの文字を作り、本を翻訳して渡しましょう」と告げると、長老は「神の言葉をカレンが得るまでにどれほどかかるのか」と重ねて尋ねた [ibid.]。

この会話を契機に、ウェイドはカレン文字の考案を開始した。彼は1831年の宣教日誌のなかで、習得した語彙を忘れないために書き残すうちにカレン文字考案の道筋が見えたと述べている [BMM 1833: 201]。ウェイドのカレン語習得に欠かせなかったのが、ミヤッチョー (Myat Kyaw: 1776-1852)²³⁾ という信徒であった。ミヤッチョーはモールメイン地域出身のモン語話者で、改宗前に徴税官としてシュエジンに滞在した経験があった。その際に、シュエジンからモールメイン付近のカレン集住地域を良く知るようになったという。彼はスゴーとポー二種のカレン語に精通し、改宗直後からカレン語話者への伝道に専念した。この人物の助力を得て、ウェイドはビルマ文字とモン文字を改良してスゴー・カレン文字を提案した [BMM 1854: 381-382]。²⁴⁾ スゴー・カレン文字が考案されると、この文字に関心を抱きアメリカ人宣教師の下で文字を学ぶカレン語話者が現れた。1840年代半ばにはスゴー・カレン識字者が増え、自ら記録を残していった。

スゴー・カレン文字と正書法が考案されると、スゴー・カレン語宣教関連書が次々出版された。1832年には、早くも小冊子とスゴー・カレン語の文法書が完成した [BMM 1833: 356]。その後も1843年末に教理問答集が1,000部と『モーニングスター』が300部発行された [BMM 1845: 176]。1840年代後半には文法書 [Mason 1846] と英語-スゴー・カレン語辞典 [Wade 1849] が相次いで作られ、本稿冒頭で紹介した『カレン知識の辞典』 [Kau Too and Wade 1847; 1848; 1849; 1850] も1840年代後半から1850年にかけて刊行されていく。

スゴー・カレン文字と正書法の考案は、宣教の一大事業である聖書翻訳を前進させた。この作業に取り組んだのが、カレン宣教専任宣教師として来緬したメイソンであった。

メイソンはまず新約聖書の翻訳に着手し、当初は作業の一部をウェイドも分担した [BMM 1842: 170]。しかし、次第にこの作業はメイソンと彼の助手として働いたカレン信徒たちが担うようになった。この時メイソンの右腕として活躍したのがクワラである。メイソンは、「単

22) 宣教師ウェイドの発言であることから、これは聖書を指す。

23) 先述したバセイン出身のミヤッチョーとは別人。

24) 1838-39年にかけて、ウェイドは、ラテン文字・ビルマ文字・モン文字を組み合わせたポー・カレン文字も考案している。しかし、ラテン文字を用いたためか、この正書法の普及はなかなかすすまなかった。1850年ごろ、ブレイトンがビルマ文字とモン文字に基づいて新たなポー・カレン文字を創案した。

語やその意味、文章の構造について、クワラに絶え間なく相談していた」[*ibid.*: 177]と回顧している。「神」や「バプテスマ」などのキリスト教の基本概念について、メイソンはヘブライ語聖書を参照し、原典に忠実な訳出を目指した [BMM 1843: 301]。英語やフランス語聖書も用い、聖書学の研究成果を踏まえた注釈書も参考にした [*ibid.*]。²⁵⁾ 全ての作業が完了し新約聖書の初版が発行されたのは、1843年のことである。²⁶⁾

IV スゴー・カレン語世界での霊と語りの多様性

IV-1 史料にみえる様々な霊的存在

聖書翻訳をつうじたキリスト教用語のスゴー・カレン語訳について述べる前に、カレン語話者の人びとは一体どのような存在を祀ってきたのか。『カレン知識の辞典』における記述を参考に考えてみたい。カレン語話者の信仰について、ボードマンは1828年に「仏教の国に暮らすゴータマを崇拜していない。ある者は、彼らは何の宗教も持っていない」と述べ、彼らは概ね無神論者だとしている [BMM 1828: 202, 242]。宣教師が無神論者と評したカレンの信仰とはどのようなものだったのか。

まず、その土地に由来する超自然的存在がいる。その代表格は、「水と土地の主」を意味するティカサ・コーカサ (ṁṁṁof ṁṁṁof/ htee kaṣa kaw kaṣa) である。²⁷⁾ 『カレン知識の辞典』では、「水と土地を治める超人的な力を持つ霊の一種」と記されている [Kau Too and Wade 1848: 349]。「水と土地」というのは、「村や町など私たちが暮らす場所」であり、「川の支流から人間が暮らす河口までの場所」を意味する [*ibid.*; Kau Too and Wade 1847: 99]。川を中心に広がる人間の居住範囲を治める存在が、ティカサ・コーカサであるといえよう。

ムカ (ṁṁṁof/ mṁ khah) あるいはティコムカ (ṁṁṁof ṁṁṁof/ thee khòh mṁ khah) と呼ばれる霊魂も重要である。これも人間の暮らす領域で力を発揮するが、村や家などの特定の狭い場所に所縁を持つ点で上述のティカサ・コーカサとは若干異なる。『カレン知識の辞典』は、「ムカ」を「村の天界に存在する超人的な力を持つ霊をムカと呼ぶ。古くはティコムカとも呼ぶ。人が死ぬとその霊魂はムカとなり、その子孫はこれを供養する」と説明している [Kau Too and Wade 1850: 19]。「ティコ」については、「ムカと同様。村で偉大な霊力を持つ霊がおり、これをティコムカと呼ぶ」とある [*ibid.*: 231]。病人が出るとティコムカと共食し、死んだ父母の名前を呼びながら「豚や鶏を供えるので、あなたの子孫を癒したまえ」と祈る [Kau Too and Wade

25) 具体的には、アメリカの聖書学者であったリプレーやキャンベルの他、ドイツの福音神学者のローゼンミュラーやイギリス人聖書学者のブルームフィールドによるヘブライ語注釈を様々参照しながら、翻訳に取り組んだ [BMM 1843: 301]。

26) 旧約聖書を含めた聖書全訳は1852年に完了した。

27) タイ側では、有声音と声調の変化が生じて「ティグチャ・ゴグチャ」と呼ばれる。

1847: 282]。²⁸⁾ ティコムカは人間の村の範囲で力を及ぼし、死後の世界と関係する霊だといえる。死んだ両親に呼びかけながら祈祷する点を踏まえると、生きる者と祖先との関係を取り持つ存在であると考えられる。また、ブワ (ɔ̃w/ bwä)²⁹⁾ と呼ばれる霊への供犠も、ムカへの供犠と同一である [Kau Too and Wade 1850: 19]。「ブワ」は「ムオブワオ (ɔ̃w:ɔ̃w:ɔ̃w/ m̃u òh bwä òh)」とも呼ばれていた [ibid. 1849: 371]。「オ (ɔ̃w/ òh)」は二音節以上の単語と結びつく接中辞なので、語幹に相当する「ムブワ (ɔ̃w:ɔ̃w/ m̃u bwä)」という表現も「ブワ」の一つの同義語であるといえる。

ティカサ・コーカサやムカが具体的な地域や人間の居住範囲と関係を持つのに対し、天界の超人的存在も崇められていた。それが、ユワ (ỹw/ ywā) あるいはカサユワ (k̃as̃ỹw/ kasa ywā) である。『カレン知識の辞典』では、「ユワ」は「天地と存在するもの全てを創った我々の主人であり、これをユワと呼ぶ。カサユワと呼ぶこともある。カサユワは病を患うことはなく不死であり、天において幾世代にわたって永遠に存在する」と説明される [Kau Too and Wade 1850: 75]。ユワは万物の創造者として認識されていたようである。「カサ (k̃as̃/ kasa)」は元々「主人」という意味を持つが、「ユワ」の同義語でもあった。『カレン知識の辞典』でも「カサはどこにいるのか我々は見えない。毎日人間を見守っているが、我々には見えない」と説明されており、超自然的存在として認識されていたといえる [Kau Too and Wade 1847: 27]。

さらに、上記の説明文は「古くはこれをトゥオ・ユワオ (t̃u:ɔ̃w:ɔ̃w/ htoo òh ywā òh) とも呼んだ」と続く。「トゥ (t̃u/ htoo)」の意味の一つに「永遠の」というものがある。よって、「トゥオ・ユワオ」を直訳すると「永遠なる神」となる。語順変化が生じて「カサユワ」と結びついた、「トゥカサ・ユワカサ (t̃u:k̃as̃ ỹw:k̃as̃/ htoo kasa ywā kasa)」 [ibid.: 369]、「ロウトゥ ロウヨウカサユワ (l̃awht̃u: l̃aw ỹw:k̃as̃/ l̃awht̃u l̃aw ỹw:k̃as̃ ywā)」 [HTG 1845: 138; 1846: 192, 200] などの表現もある。「トゥ」の同義語である「トゥヨウ (ht̃u: ỹw:k̃as̃)」や「ロウトゥ ロウヨウ (l̃awht̃u l̃aw ỹw:k̃as̃)」が含まれており、どれも「永遠の主なる神」と直訳できる [Kau Too and Wade 1848: 370; 1850: 148]。以上のように、「ユワ/カサユワ」という崇拜対象の呼び名は複数存在し、言及の在り方も多様であった。

28) タイで調査したラジャによれば、ティコムカへの供養儀礼は家族の成員である個々人の健康祈願や息災を祈念して行われる [Rajah 2008: 257]。家族の事柄を扱う霊である一方で、人間の出生にもその威力を発揮する存在であることから、吉松はこの儀礼を行う単位は夫婦を基本とすると述べ、「人間の生殖を司る神」と位置付けている [吉松 2016: 84]。ムカ/ティコムカを祀る儀礼は、呼称には地域差があるが、「オヘ」「オマヘ」「オマケ」という名称で呼ばれる [同上書: 64-90; Hayami 2004; Rajah 2008: 257-268]。

29) ブワについては、飯島が「家神 (ブガ bgha)」として、その祖霊信仰の実践を詳述している [飯島 1971: 146-148]。速水も、各家庭での祖霊への供養儀礼オへの対象となる祖霊としてブガ (bgá) を挙げる [Hayami 2004: 226]。吉松によれば、ブガとシコムカは同一の存在である [吉松 2016: 62]。速水とラジャによれば、儀礼オへの対象となる霊がシコムカ (sí khò miù xā) である [Hayami 2004: 100-102; Rajah 2008: 257]。シコムカは、本論が扱う表記法に従うとティコムカとなる。

さらに、ユワ／カサユワは唯一無二の存在ではなく、他の靈魂と併存するものとして認識されていた。これを例証するのがカレン伝道師による1843年の記録である。非キリスト教徒の祈祷者が豊作や子孫の安寧を祈り、「死の国の主（ဝံမုကောဝ် သံတံကောဝ်/ *thee mu kasa thee baw kasa*）、ムブワの主（မုကောဝ် ဘုးကောဝ်/ *mu kasa bwä kasa*）、ティコムカの主（သံယိန်ကောဝ် မုပါကောဝ်/ *thee khòh kasa mu khah kasa*）、トゥカサ・ユワカサ」といった靈に呼びかけた [HTG 1844: 123]。最後に登場した「トゥカサ・ユワカサ」は、上述のとおり「永遠の主なる神」である。「死の国の主」は、貧困や病気の際に救済を求めて人間が呼びかける靈魂を指す [Kau Too and Wade 1850: 232]。³⁰⁾「ブワ」や「ティコムカ」は、既に述べたとおり村や家と関係を持つ祖靈である。

また、1844年にカレン伝道師が出会ったあるカレン預言者は、祈祷の際に「巨岩の神（လၢ်မုကောဝ် လုထီၣ်³¹⁾ ကောဝ်/ *luhmü kasa laytaw kasa*）、四方向の神々（စုစုၣ် ကောဝ် ၊ စုထွဲ ကောဝ်၊ ကိၣ်ခံကောဝ် ၊ မိၣ်ညါ ကောဝ်/ *susà y kasa suhtweh kasa kòhkee kasa mehnnyah kasa*）」³²⁾、「水と大地の主（ティカサ・コーカサ）」と呼びかけ、供犠を執り行った [HTG 1844: 102]。ここでも、ティカサ・コーカサは様々な靈魂と同列で呼ばれている。多様な靈が併存し、それらを同列に崇めることはカレン世界の常態であったと考えられる。

IV-2 口承における靈的存在

こうした数多の靈たちは、口承においても言及されることがあった。『カレン知識の辞典』第3巻の183-184ページには口承の一覧表があり、160種もの口承が集録されたことになっている。ただし、この全てが『カレン知識の辞典』で確認できるわけではない。160種のうち、内容が実際に記録された口承は140のみである。そこに登場するのは、動物、夫婦や兄弟、孤児などであり、超自然的存在が登場する口承は比較的少ない。祖靈信仰者を意味すると考えられる「ムカの人」が登場する伝承があるばかりで、その数は多くない [Kau Too and Wade 1850: 242]。

前述のカサ／カサユワについても、「カサ」をタイトルに冠した語りは2つしかない。その一つは「カサーブ（稲の主）」である [Kau Too and Wade 1849: 353-354]。二つめは、コラーワ³³⁾と

30) 「ティ（ဝံ/ *thee*）」は「死ぬ」という動詞。「ム（မု/ *mu*）」と「ボオ（ဝံ/ *baw*）」は、「ボオム（ဝံမု/ *baw mu*）」という「領域」を表す名詞であり、ここでは「ティ」と併せて対句表現が採られている。

31) 「レエトオ（လုထီၣ်）」の誤表記の可能性はある。『カレン知識の辞典』には、「巨石・巨岩」を意味する「ラーム（လၢ်မု/ *luhmü*）」の同義語として、「レエトオ」が挙げられている [Kau Too and Wade 1850: 123]。

32) 直訳すると、「左手の神、右手の神、首の後ろの神、眼の前の神」となる。

33) コラーワは、「白い（ワー）西方出身の人（コラー）」という意味である。コラーはビルマ語の「カラー（ကုလား）／外来の」に由来する。

プワカニョウ³⁴⁾が兄弟として登場し、かつカサユワという存在との関係を主題にした「カサユワの伝承」である [Kau Too and Wade 1850: 310]。140あるなかで、この口承のみがカサユワ／ユワを明言している。

その内容は次のとおりである。カサは、自分と同じように死ぬようにと子供たちに伝えた。子供たちは全員海の中に飛び込んだ。コラーワは「お兄さん、私は戻る」といったが、プワカニョウは戻ることはできないと告げ、両者は別れた [ibid.: 310]。コラーワは死ぬことができず、森の中に逃げ隠れた。その後、カサも死ぬことができなかったので、子孫たちに彼の元へ戻るよう伝えた。(他の子供たちはカサの元へ戻ったが [筆者注]、) プワカニョウだけが遠く離れた場所にいた。カサはコラーワに対し自分の元に留まるよう伝え、プワカニョウの場所に行くとき災難が起きると述べた [ibid.]。ここまでが『カレン知識の辞典』に収録された内容で、この伝承の後にはカレンの長唄が付されている。

上記の伝承では、本／文字というモチーフは登場しない。しかし、コラーワとプワカニョウが登場する点や、戻ってくるようにというカサの言い付けに従わないプワカニョウに災難が降りかかる物語の展開は、神の命に背いたため苦境に苦しむという宣教師版の伝承にも通ずる部分がある。

宣教師版の「失われた本」伝承との関連でいえば、本がモチーフとして登場する「金と銀の本と綿」という伝承がある。ただしこれも、メイソンやウェイドが記した「失われた本」伝承とは似て非なる内容である。

そのあらすじは以下のとおりとなる。船で交易をするコラーワが、プーサーリという町でプワカニョウに出会い、両者は互いを兄弟と呼ぶ間柄であった。コラーワは交易先で綿花(あるいは綿)を見つけたが、それを売りつくしてしまいプワカニョウの所へ持ち帰ることができなかった。そのとき、プーサーリ³⁵⁾がプワカニョウの元へ帰るようコラーワに伝え、「プワカニョウの本はその昔、中身は金で造られていた。コラーワは銀で造られた本を得た。もしあなたが正直であれば戻ってくるることができる。もし正直でなければ、私たちの所には戻ってこられない。船上での道中、それ(本 [筆者注])を開いてはいけません。あなたの町に帰り着いたらみなさい」といった [Kau Too and Wade 1850: 105]。しかし、その途中でコラーワと船員は本を開くかどうかで対立し、その最中に本を壊してしまった。さらにはこれをめぐって殺し合い

34) 「プワカニョウ」は、「人間」あるいは「カレン語話者」という意味で、近現代的には「カレン人」を指す。狭義ではスゴー・カレン語話者を意味するだけの場合もある。タイのカレン民俗誌を描いた吉松は、元々「われわれカレン」という民族自称は成立していなかったと批判する [吉松 2016: 25]。近代的な意味でのカレン民族という自意識は元来存在しなかったという点は筆者も同意するが、1840年代の史料では、ビルマ語話者やモン語話者と対比させるかたちで言語的差異を自認した「プワカニョウ」つまり「カレン語話者」という用例が確認できる。

35) 原文では、町の名前であるはずのプーサーリがここでの発話者となっている。カレンの口承では非生物が擬人化して登場することは珍しいことではないので、ここではそのまま訳出した。

に至ってしまい、コラーワは町には戻ることができなかった [ibid.]。

上記には、登場人物のコラーワとプワカニョウが兄弟と認識している点や、所有していた本を破壊し失う点など、ウェイドが耳にした伝承と幾つかの共通点が見いだせる。一方で、交易をするという設定やコラーワが本を損壊させるなど相違点もある。プーサーリという地名については実在するのかを含めて詳細は不明である。

上記からわかることは、宣教師が記録した「失われた本」伝承に登場するモチーフやストーリーは元々一つの伝承のみに由来するものではなく、複数の語りで自由に参照可能なものであったということである。つまり、どの要素に言及してどのようなストーリーで語るかに関する明確な決まりはなく、類型はいくつも存在した。そもそも口承とは、聞き手の置かれた状況や周辺環境、さらには語り手自身の状況によって変幻自在であり流動性も高い。『カレン知識の辞典』に所収された内容も、聴衆の反応に呼応した即興的な口承を記録したものであると推察される。

V キリスト教的スゴー・カレン語語彙体系の生成と語りの固定化

V-1 聖書翻訳とキリスト教的スゴー・カレン語語彙体系の創出

多様な表現や可変性の高い口伝が常態であったカレン語世界のなかに、バプテスト宣教は文字文化を導入していった。その最初の過程として、聖書翻訳作業をつうじてキリスト教的語彙体系が創出された。

(1) 既存語彙の活用

メイソンによるキリスト教用語の訳出には、3つのパターンがある。一つめは、聖書に登場する原音のスゴー・カレン語転写である。これは、特に人物名や地名にあてはまる。そのなかで代表的なのはイエス・キリストその人である。メイソンは、「イエシュウ・カリ (ယှ်ရှ်းယှ်း/ yà y shū hka yě)」と表記した [HTG 1843: 57; Mason 1853]。あるいは「カサ・イエシュウ (ကဆ်ယှ်ရှ်း/ kasa yà y shū)」とも記された [HTG 1843: 57]。これは、「主なるイエス」あるいは「神イエス」という意味になる。³⁶⁾

次に、既存のスゴー・カレン語を使用した場合である。例えば、「罪」は「タデバ (တဒ်းတဒ်း/ tādēhbā)」 [HTG 1843: 57; Mason 1846: 319; Mason 1853: 929] という語彙で表現された。『カレン知識の辞典』には、「悪人が間違ったことをして、地獄において惨めに感じることをタデバという。両親を尊敬しない者はタデバであり、地獄に落ちる」とある [Kau Too and Wade 1849:

36) 「カサ」を神と訳出する経緯については後段を参照。

39]。この引用文に登場する地獄も、神が住む天国と対置される重要な観念である。スゴー・カレン語訳では「ラヤ (လၢယာ/ laya)」と表現された [HTG 1844: 109; Mason 1853: 851]。これはビルマ語「ガイェー (ဂဲ/ gaye/ 地獄)」からの借用語であり、スゴー・カレン語風に転訛している [Mason 1846: 320]。

三つめの類型は、既存語彙を組み合わせた新造語である。例として、三位一体の一角をなす「聖霊」と「聖書」を取り上げてみよう。聖霊は、「タ (တ/ thā/ 魂・命)」と「ソオスリイ (စီဆုံ/ saw hsgee/ 清い)」を合わせた「タソオスリイ (တ:စီဆုံ/ thā saw hsgee)」と表現された。二つの単語はどちらもごく基本的なスゴー・カレン語で、「ソオスリイ」は「穢れがない」状態を指す [Kau Too and Wade 1848: 75]。ただし、「タソオスリイ」という語句自体は『カレン知識の辞典』には所収されておらず、キリスト教宣教以前からあった表現なのか疑わしい。聖書は、この「ソオスリイ」と本を意味する「リ」を合わせて、「リソオスリイ (လီဆုံ/ lee saw hsgee)」と訳された。直訳すれば「清らかな書」となるこの単語は、メイソンをはじめとするアメリカ人宣教師らの造語の可能性が高いと筆者は考えている。非キリスト教徒による「リソオスリイ」という表現の用例が確認できないうえ、『カレン知識の辞典』の説明も「神の言葉とイエス・キリストの正しい教えの本をリソオスリイと呼ぶ」 [Kau Too and Wade 1850: 105] と、明らかにキリスト教的な説明に留まっているためである。メイソンが纏めた『カレン文法の梗概』巻末の語録にも、「リソオスリイ」と「タソオスリイ」は含まれていない。メイソン自身も、これらの表現を既存のスゴー・カレン語ではないと認識していた可能性が考えられる。

(2) 唯一神としての「ユワ／カサユワ」

メイソンは、神を表現する適切なスゴー・カレン語を見つけるのに苦労したと 1856 年の『バプテスト宣教雑誌』掲載記事のなかで述懐している [BMM 1856: 129]。その理由は、カレンの霊的存在が多様であったためであるという。

神に対して用いる名前に関して、カレンの人びとは意見が一致しない。一つの単語がある語句の一部で使われ、別の語句では別の単語が用いられる。伝統的に、ユワが全能全知の普遍的な世界の創造者であり支配者であることに私は気づいた。そして、彼(ユワ [筆者注])こそが、真なる神だと理由づけた。なので、私はユワという単語を礼拝や説教に取り入れ、その他一切を排除した。[*ibid.*]

上記の内容は、多様な霊的存在を認識しつつも、メイソンが最終的にユワ／カサユワに絶対的権威を与えたことを証している。しかし、聖書翻訳作業に取り組んでいた 1834 年当時、上記についてメイソンは一切言及せず、スゴー・カレンの神はユワ／カサユワのみだと断定し

た。本稿冒頭で取り上げた「カレンの伝統」という手紙において、カレンがヘブライ起源の宗教につらなる民であると証明するために、メイソンは「神は、偉大なるカサあるいは偉大なる主；祖父という単語プーにちなんで、偉大なるプーあるいは偉大なる祖先；そしてユワと呼ばれる」[*ibid.*: 383]と説明した。さらに、「ユワ」の子音がヘブライ語の神「ヤハウエ (Yahweh)」と一致すると強調することで、「ユワ」は「ヤハウエ」の転訛であるとまで主張した [*ibid.*]³⁷⁾

上記からは、聖書翻訳の過程で「トゥカサ・ユワカサ」や「トゥオ・ユワオ」などの豊富な類似表現が捨象されたことがわかる。数多に存在した崇拜対象への呼称も一元化され、一つの霊的存在にのみ宗教的権威が付与された。まさしく唯一神ユワの誕生であった。

「神＝カサユワ」という等式は、その後のスゴー・カレン語文法書や辞書類にも引き継がれた。1846年にメイソンが著した『カレン語の文法梗概』の巻末語録でも、「ユワ」は「流れること；イエホバ」と訳された [Mason 1846: 335]³⁸⁾ ウェイド監修の『スゴー・カレン語語彙』においても同様に、「ユワ：イエホバ；水のように流れる」とある [Wade 1849: 875]。

(3) 悪魔としての「ムコリ」

聖書における悪魔は、神の正しさとその教えに忠実であることの重要性を示す必要悪として不可欠な存在となっている。この存在を表現するために、「ムコリ (ᵐᵒᵒᵒᵒᵒᵒᵒᵒ/ mu kāw le)」という語彙が用いられた [Mason 1853: 453]³⁹⁾ 「悪魔」の訳出について、1833年当時のメイソンは次のように説明している。

悪魔はカレン語で幾つかの名前で知られており、その中で最も一般的なのはクープロウ (Ku-plaw), 欺く人という呼び名である。… (中略) …カレンの人びとは、それ (Ku-plaw という存在 [筆者注]) が以前は天界に暮らしていたと信じている。しかし神の命に背いたので、天から追い出されてしまったのだ。 [BMM 1834: 384]

メイソンが「Ku-plaw」と転写したスゴー・カレン語は、「ノオカプロウ (nawkaplaw/ ᵒᵒᵒᵒᵒᵒᵒᵒ)」という単語であろう。「ノオ (naw)」は女性に対する接頭辞型の敬称なので、メイソンは固有名詞の一部ではないと判断してあえて表記しなかった可能性が考えられる。

「ムコリ」が「悪魔」の対訳として定着していったのは、1840年代に入ってからのことである。『カレン語の文法梗概』では、「ムコリ」は「ビルマの精霊 (nat), サタン」と訳出されている [Mason 1846: 269, 332]。ウェイドも1849年に著した『スゴー・カレン語語彙』において「サ

37) この内容に関する分析は、[池田 2012: 236-235] が詳しい。

38) 「ユワ」には「流れる」という動詞としての用法もある。

39) 例えば、スゴー・カレン語聖書のヨブ記では、悪魔は「ムコリ」と表現される。

タン、デビル」と定義している [Wade 1849: 845]。ただし、ウェイドは「ノオカプロウ」を「ムコリ」と同義とし、「欺く女性、女性の様相をした悪魔」とも説明した [ibid.: 668-669]。

悪魔と定義されたムコリ／ノオカプロウとは、そもそもカレン世界では如何なる存在だったのか。『カレン知識の辞典』では、宣教師とは異なる説明がなされている。

ムコリ：はるか昔の破壊者のことをムコリと呼ぶ。一部の人はノオカプロウとも呼ぶ。ノオカプロウ／ムコリは、男性であるのに、その心が女性になった人のことを指す。[Kau Too and Wade 1850: 23]

ノオカプロウ：遠い昔に長老たちが伝えたある破壊者のことを、ノオカプロウと呼ぶ。ノオカプロウは破壊者の一人。女性を欺き、(欺いた男性が自身の [筆者注]) その心を女性にしてしまうものをノオカプロウと呼ぶ。男性を欺いて、(女性が自身の) その心を男性にしてしまうことを、心が悪くなった破壊者と呼ぶ。ムコリとも呼ぶ。[Kau Too and Wade 1849: 112]

まず、「ノオカプロウ」は「ムコリ」の同義語であった。⁴⁰⁾そしてどちらも、「破壊する者」という意味を第一義に持つ。さらに、ノオカプロウあるいはムコリとは「心が悪くなった破壊者」の状態だという。「心が悪くなる」ことの例として言及されたのは、身体的性とは逆の性別のように振る舞うことであった。これはいわゆるトランス・ジェンダーを自然の摂理に反するとみなして述べられたものと推測される。『カレン知識の辞典』は、「パラー」という動詞の意味として「破壊する」の他に、「悪意のある人になること。人のものを壊すことをパラーと呼ぶ。ムコリは大きなパラーと呼ぶ」[ibid.: 154]と説明している。破壊という実害を生じさせる心理状態から「悪意ある者」という意味が派生し、その典型的存在がムコリだと理解されていたようである。

さらにムコリは、1846年にカレン信徒が長老から聞いたという伝承のなかでも人に対して悪さを働き、色々なものを破壊する天界の存在として言及された [HTG 1846: 194]。ムコリ以外に、悪さをする存在としてはタイエータカ (ထရဲထရဲ/ thareh thahkä)⁴¹⁾あるいはナオ・プリーオ (နဝ်းဟ်ပျဲ/ nāōh hpwèe ōh), そして人の魂を食らい病をもたらすタムカ (တမုဟ်/ thamuhka) といった存在が史料には記されている [Kau Too and Wade 1850: 20, 74, 208]。これらの存在は、供犠や共食の対象となる精霊・祖霊とは別個の存在である。

唯一神を認めることが重要なキリスト教では、多様な崇拝対象は許容されない。そこでメイ

40) 前掲したウェイドによるノオカボウの定義は、『カレン知識の辞典』を参照して編纂された『スゴー・カレン語彙』に依る。よって、この引用文を参考にしたものだと考えられる。

41) タイエータカはビルマ語「タイエー (ထရဲ)」の借用語であり、「幽霊」と訳出できる。

ソンは、常軌を逸した存在であったムコリが神の摂理に背くものであるという認識に立ち、キリスト教的文脈における「悪魔^{サタン}」という意味を与えたと推察される。

このようにして、キリスト教世界観は既存のスゴー・カレン語語彙や、新たな造語によって表現されていった。「イエシュー」や「リソオスリイ」などカレン語話者にとっても耳慣れない言葉も多く創出された。従来のスゴー・カレン語では理解しがたい世界がキリスト教スゴー・カレン語語彙体系を用いることで表現され始めた。

V-2 キリスト教スゴー・カレン語語彙体系を活用した伝道

キリスト教世界観を説くという宗教的使命の下で活動したカレン司牧者にとって、キリスト教的スゴー・カレン語語彙体系は、当然参照すべき語り方となった。そのため、キリスト教的語彙や表現は伝道の場において広く活用されていくこととなった。この新しい語彙体系が用いられた一例として、バセイン近郊のジュートゥ村出身のマウンイエーの日記をみてみよう。マウンイエーは、自身もかつて実践していた祖霊信仰に言及しつつ、キリスト教への入信を説いた。なお、霊的存在に関する表現の違いを示すために、該当箇所は原文のままカタカナ表記した。

先生たちは、それ（キリスト教 [筆者注]）について私に説いた。このようなことを私は少しも理解できなかつた。理解できたのは、先生たちが、もしあなたがロオトゥー・ロオヨオ・カサユワを信じ、イエシュー・カリに魂を捧げるのでなくユワに祈るならば、ユワはあなたに新たな魂を与えるだろう、と述べたことだつた。そしてあなたを邪悪なこと、ムオブワオやタイエータカを供養することとその責任から解放し、そしてラヤのタデバからあなたを救ってくれる、と。私は、それが本当で、私たちが信じればムオブワオやタイエータカへの責任から本当に解放してくれるのか、と聞いた。彼らは、もしユワを信じるならば、本当にあなたを解放してくれるだろうと答えた。それが本当ならば私はユワを信じる、と私は行って彼らの前でユワに祈つた。…（中略）…しかし私は彼ら（妻や両親）の家についていった。そして私がブワと共食したことは、タソオスリイではなかつた。なので、私は食べ終わった後、豚肉を全て吐き出してしまった。私はそれがタデバであるとよく知つていた。…（中略）…ムコリの慣習を捨て去り、ユワを強く信じ、あなたの魂がカサ・イエシュー・カリの名の下にあると信じなさい。[HTG 1846: 194]

上記には、前節でみたキリスト教用語が多く使用されている。ただし、神を「ロオトゥー・ロオヨオ・カサユワ」と表現するなど、語句の使用法には若干の揺らぎもみえる。「タソオスリイ」の用法も、文意から判断すると「聖霊」という意味ではなく、字義どおり「穢れのない心・気持ち」と捉えた方がよい。

マウンイェーの記事で興味深いのは、精霊への供犠を「ムコリの慣習」と表現した点である。引用文からは、精霊ブワへの供犠を罪つまり正しくないものと認識していることが読み取れる。そして、最後の一文ではそれを「ムコリの慣習」と呼び、放棄すべき行為として位置付けている。こうした書きぶりは、「悪魔＝ムコリ」という聖書的表現が、伝道の現場では精霊や祖霊を一元的に表すために用いられたことを示している。

パータというカレン伝道師も、祖霊信仰を「ムコリの慣習」と呼んだ。「何人かはカサユワに祈るが、父母の慣習を捨て去ることができていない。彼らは未だにムコリの慣習と共にある」と記している [HTG 1845: 149]。ここでは精霊への明確な言及はないが、父母の慣習という家庭内での行為が述べられていることから、祖霊供犠のことを指すと判断できる。クワラも、1845年に「私は、私たちのユワの言葉を宣べ伝えた。しかし後にムコリが彼らの心に戻ってきたので信仰していない」 [ibid.: 152] と信徒の様子を描写した。キリスト教を受け入れたにもかかわらず祖霊供犠を続けるのは、「ムコリが彼らの心に戻ってきた」という状態だという。

さらに、彼らの伝道における語りは、モノとしての聖書を活用しながら為された。伝道の際、聖書や小冊子の朗読が度々行われた [HTG 1846: 176, 181]。例えば、タヴォイ近郊の伝道師エーティは、参集した人々の前で「私は、リソースリイのなかの一節を開いて、ソウ・アードとノオ・イウがカサユワの言葉に背くことについて述べた」 [ibid.: 179]。「ソウ・アード」と「ノオ・イウ」は、アダムとイブを指す。聴衆の目の前で、スゴー・カレン語小冊子を取り出しカサユワへの信仰を説いたのである。クワラも、1847年に「各地の信仰者の間に文字が読める信徒を一人ずつ配置して、彼らが子供たちに文字を見せ、宣教師のようにユワの言葉を教え説くことができるようにした」と記している [HTG 1847: 296]。文字あるいは書物を見せ、説教するスタイルが広まりつつあったといえる。

伝道の語りは、聖書と「失われた本」伝承をも関連づけていった。クワラは、カレンの人びとに向けて、本が戻ってくるという祖先の言い伝えが成就したと語りかけた。

私たちの先祖はいった。このカレンの本はいつか帰ってくる。本が戻ってくるときに、その頭脳は発達する。そしてよりよくなる。このようであるのだ、兄弟たちよ。本はいつ戻ってくるのか。上記について、私たちの祖先の言葉は実現した。… (中略) …文字が今では取り戻されて発展し、勉強する全ての人が智慧に到達した。女も男も、
「女は文字を書き、男も文字を読む。男も文字を書き、女も読む」
… (中略) …コラーワの先生たちがやってくる、カレンの人たちに教えてくれた。私たちは子供のようであった。私たちは何も知らなかった。… (中略) …あなたが文字を知るとき、それをしっかり理解しなさい。人びとはみな文字を知らない。そして、自分の文字がないことは闇の中にいることだ。しかし、文字があってもその文字が我々の主のユワから

のリソオスリイでないとしたら、それもまた闇の中にいるということだ。[HTG 1846: 174]

引用文中の「女は文字を書き、男も文字を読む。男も文字を書き、女も読む」という箇所は、対句表現を用いて4句で構成されている点から、ターという長唄の調子で詠まれたと推測される。カレン語の独特の唄を織り交ぜることで、説教の内容にカレン語らしい雰囲気をつくる効果を狙ったのかもしれない。第IV章でみた『カレン知識の辞典』所収の口承で描かれた兄弟ではなく、「コラーワ」は先生とされここでは宣教師を意味する。そして、文字を理解することが「ユワの道」つまりキリスト教と同義的に語られた。その際の文字は、「ユワのリソオスリイ」すなわち聖書でなければならなかった。文字あるいは本の有無が重要であった従来の口承とは対照的に、それはユワから与えられたものでなくてはならず、さらに文字の習得という人間側の行為の必要性も唱えられた。

1845年12月から約2カ月間デルタ地域で伝道したミヤッチョーも、文字の習得の必要性を宣べた。旅路では、立ち寄った村で集まった人びととともに、聖書を読み祈った [ibid.: 181]。そして伝道旅行12日目に、「その次に向かったのはエイキーという地域で、そこには知人のイエーポという女性信徒がいた。…(中略)…この村では、『もしあなたが文字を学ばず、ユワの道を選ばないならば、道に迷い貧しくなるだろう』と説教した」 [ibid.: 182]。つまり、文字の習得はすなわちユワの道を選択することであり、これを拒否する者は貧困に陥るのである。キリスト教的語彙としての「ユワ」が参照されながら、文字の習得という能動的行為が強調されたことがわかる。⁴²⁾

V-3 キリスト教的語彙を用いた口伝：語りの固定化とコミュニケーションの境界

ここまでの事例をまとめ、バプテスト宣教による文字文化導入の過程について整理したい。まず、聖書翻訳をつうじて、キリスト教的スゴー・カレン語語彙体系が誕生した。既存の語彙あるいは造語を用いて、キリスト教の基本概念が表されていた。

1840年代当時、スゴー・カレン文字を自在に操ることのできた者はごく少数であった。伝道場では聴衆に応じた語りが依然として効果的であり、重要な役割を担ったと考えるべきである。そこで、カレン伝道師らの記述をみると、キリスト教的スゴー・カレン語語彙をふんだんに用いて説教や伝道が行われていたことが確認できた。彼らは聖書や小冊子を手に携え、「ユワ」を信じる正しさを説いた。その語りの正当性は、携帯する書物にあるとされた。一方で精霊信仰は、「ムコリの慣習」と総称されることになった。カサユワ以外の精霊たちは、悪しき存在と位置付けられた。本来多様な語りが可能であった口承も、ユワから授けられた本／

42) 伝承に言及したうえで、スゴー・カレン文字の習得とキリスト教への転向を、1850年代以降もカレン司牧者たちは頻繁に奨励した [HTG 1854: 80; 1855: 214-215]。

文字が、コラーワの手によって再びもたらされるといふ特定の文脈の中で語り直された。口承も、キリスト教的語彙体系を用いることで画一的に語られ始めたのである。

カレン伝道師による語りの内容に関し、文字の習得の重要性が説かれるようになった点も見逃せない。聖書主義と現地語伝道を指針とする米国バプテスト派は、信徒自身の聖書理解を重視した。聖書を正しく理解するために、カレン宣教においてまず必須となったのが文字の習得であった。クワラの説教が例示するように、この新たな要素は「失われた本」伝承のなかにも埋め込まれた。従来であれば、本の有無や所有が重要なモチーフとして語られてきた。しかし、バプテスト的文脈が加わり、文字を習得する意志と能動的行為が苦しい現況からの脱出に不可欠な要素となった。このように、勤勉さを要請しつつ文字の習得が強調されたことは、人間の主体性に道徳的価値を見出そうとする近代的観念がカレン世界に移植され始めたと理解できる。

以上全てを総合すると、バプテスト宣教による文字と正書法の考案は、単に文字文化を導入しただけでなく、口伝の固定化という変化をも生じさせたといえる。無文字社会のカレン世界に文字が誕生したこと自体にこれまで学術的関心が寄せられてきたが、その影響はより通時的であり多方面に及んだ。忘れてはならないのは、この変化が聖書翻訳と宣教印刷物の普及とほぼ同時にすすんだという点である。新しい正書法を用いた一律な表現や文章は、必然的にキリスト教世界観を説明するために使用されていった。その結果、カレン司牧者たちの説教も、聖書という絶対的典拠をもつ語りとして画一的なものとなった。口承もキリスト教的文脈で語り直され、従来の流動性は薄れ固定的なものへ変化しつつあった。

この新しい語り方は、同一言語を話しているにもかかわらず、話し手である司牧者の言葉が聴衆には理解できないという不可解な状況を生じさせていった。カレン司牧者らは、従前にはない語彙や表現によって説教という語りを行った。ところがそれは、スゴー・カレン語文字やキリスト教的語彙体系を知らないカレン語話者にとっては、母語であるのに理解不可能なものであった。元来存在しなかった語彙をふんだんに用いた語りは、文字と同様に、それを知らない者にとって理解できない代物であったといえる。アメリカ人宣教師やカレン伝道師の言葉を聞いたマウンイェーも、「私は少しも理解できなかった」と述懐している [HTG 1846: 194]。つまり、伝道師らの一元的な語りの様式は、文字と正書法、さらに新たな語彙体系を知る者とそうでない者間でのコミュニケーションを困難にしていたといえる。聞いただけでは理解できないスゴー・カレン語オラリティと、識字力があっても意味が把握できないリテラシーが存在することになったのである。

VI プロテスタンティズムの諸影響——文字文化と信仰の関係性

VI-1 プロテスタント的理念とカレン伝道師の葛藤

最後に、上記の指摘がどのような論点の方向性を指し示すのか考えてみたい。冒頭で言及したキーンの議論によれば、改宗をつうじ近代的道徳観を内在化させていく一連の経験は、新たな種類の混乱も招くことにもなった。同様の現象は、1840年代のカレン宣教でも起こっていた。

プロテスタンティズムでは聖書を読む能力だけでなく、その内容を心から理解する誠実さが要求される [今村 2019: 77]。カレン宣教でも文字を習得し聖書を理解するという能動的行為が重視された。司牧者層にとっては、聖書の内容を正しく伝え語ることが重要であり、キリスト教的語彙を活用した一元的な語りこそが正当であった。

この理念は、1840年代当時のカレン伝道師らに神の教えを正しく理解し語ることを迫ることとなった。その結果、一部の者は自身の資質について不安を抱き葛藤することになった。モーラマイン近郊に暮らしたモーク (Mōk/Moh Koo) という教会牧師は、1851年に自身の牧師としての資質をひどく心配する手紙をアメリカ人宣教師に送っている [HTG 1852: 135-136]。彼は若い時にカレン初の受浸者タービュの下でキリスト教と出会い学んだ [ibid.: 135]。モークは、タービュがボードマンやメイソンなど宣教師から直接伝道をうけたことと対比させて、自身の状況を述べる。「私が勉強したところでは、指南書⁴³⁾が完全ではなかった。まだ聖書も存在していなかった。現在では、聖書も地理誌も他の本も多く揃っている。私は、多くのことを理解せずよく学んでいない。村々の教会員を世話しなければならないが、私の教えはよくないのではないかと心配している… (中略) …どうか私たちのために聖書の意味を (『モーニングスター』に [筆者注]) 載せてください」と陳情したのである [ibid.]。

モークがタービュの教え子であったという点から、彼がキリスト教を学んだのはタービュ死去の1840年以前だとわかる。1840年以前といえば、聖書翻訳は新約ですら完了しておらず、スゴー・カレン語印刷も開始されて間もない時期である。語りの典拠となる聖書やその内容を説明する注解書が圧倒的に不足するなかで、モークのような司牧者は聖書の内容を十分理解しないまま説教を行う必要に迫られていたのである。そして宣教がすすむにつれ、自らの説教には間違いがあるのではないかと不安を抱えた日々を過ごすこととなった。

モークが吐露した不安は、各人が文字や書物を読みキリスト教世界観をきちんと理解する行為が宣教において求められたために生じたといえる。アメリカ人宣教師のように正しくキリスト教を伝えなければならないという使命感と、それを達成するのが困難な実態のはざまに内面的混乱が起きていた。カレン語世界での語り本来自由で流動的なものであり上記のような葛

43) 伝道の際に用いる小冊子や聖書注解書のことを指すと考えられる。

藤とは無縁であったことを踏まえると、これは近代的宣教を介したゆえの新たな種の混乱と捉えることができるだろう。

VI-2 カレン語世界における文字文化と信仰の不可分性

そして最後に述べたいのが、プロテスタント宣教の一環でもたらされた文字文化が、聖性を帯びたものとしてカレン語世界で受け止められていったという可能性である。ただし、この点について現時点では十分に論証できるだけの史料が不足しているため、以下では議論の展望を示すだけに留めたい。

キリスト教的スゴー・カレン語語彙を用いた伝道側の語りは、聴衆であるカレン語話者が十分理解できないものとなっていた。ところが、1840年代のスゴー・カレン受浸者数は増加傾向にあった。つまり、理解不可能であるにもかかわらず伝道師の説教に魅力を感じ、カサユワの力を信じた人びとがいたということになる。

これを理解するには、文字の聖性や秘儀性との関連を手がかりに考えてみるとよい。固有の文字を持たない者たちの間で文字が力の象徴とみなされた理由は、読み書き能力を持つ者のみ意思疎通が可能であるという秘匿性にあった。それを知り得る者しか理解できないという点に着目すると、キリスト教世界観を知る者のみ理解できるキリスト教的スゴー・カレン語語彙とその語りも、文字そのもの同様に高い秘匿性を有したと解釈できる。文字の秘儀性・呪性に加え、伝道における語りも不可思議性・秘匿性を帯びていたのではないか。そして理解不可能であるがゆえに、神の力は人知を超越した神秘的なものとみなされた。神を信じれば祖霊への責任から解放されるという説教を信じたカレン語話者がいたように、精霊供養の責任や貧しい状況からの解放と救済を求めた者たちの一部が、理解不可能なキリスト教の神の力に魅了されていった。そのなかで改宗後も最も熱心でありつづけた者たちが、本稿が取り上げてきたカレンの司牧者たちだといえる。

重要なことは、彼らが秘儀的・呪的なキリスト教世界観に正当性を見出したことである。カレン司牧者らは自らの伝道活動を、仏僧が説法することを意味するビルマ語動詞「タヤーホー(တေးဟော/ taya ho)」を用いて「真理を説く」と表現した。これは、仏法を意味する「タヤー(တေး/ taya)」を「説く(ဟော/ ho)」という意味で、仏教の文脈でいえば「真理である仏法を説く」となる。カレン伝道師たちは、語順を転換させ「ホータヤー(ဟောတေး/ haw taya)」と書いている[例えばHTG 1846: 177; 1848: 306]。⁴⁴⁾ カレン司牧者らにとって、キリスト教という新しい世界観は真なるものであり、それを伝える語りや書物も正しいものであった。

ただし、キリスト教の神秘的要素を感得したカレン語話者はカレン語世界の総体からすれば

44) ビルマ語はSOV型だが、スゴー・カレン語ではSVOの語順を取るため、「タヤー」と「ホー」は逆転する。

ごく一部にすぎなかった点には留意したい。キリスト教改宗後も精霊への供儀を継続する信徒の様子は、1840年代をつうじてよくみられた。カレン司牧者たちがそうした様子を「ムコリの慣習が戻ってきた」と表現したことは、既に確認したとおりである。精霊信仰・祖霊供儀への批判が散見される事実は、カレン平信徒の間では「ムコリの慣習」が全く衰退していなかったことを逆説的に示している。カレン改宗者にとって、ユワの聖性は比較的認めやすいものであったかもしれない。だが、祖霊や精霊を悪と位置づけ、精霊供儀を放棄する世界観を容易には受け入れられなかった。⁴⁵⁾ 精霊信仰者にとって儀礼の放棄は、病気や天災からの救いの道を一切絶つことを意味するためである。そもそも、霊の仕業は人間からの働きかけ如何で変わるものであり、精霊・祖霊は本質的な悪ではなかった。

さらに付言すれば、1830年代から40年代にかけての伝道活動の大半は失敗続きであった。アメリカ人宣教師やカレン伝道師は入村を断られ、伝道すらままならなかった。キリスト教信徒に対する人びとの反応も冷ややかであった。例えば、キリスト教を信じるようになったヨオームという女性は、改宗が原因で夫と離縁してしまった [HTG 1848: 285]。彼女の家族は祖霊供儀を継続し、従わないヨオームは度々非難された [ibid.]。タサーという青年がキリスト教へ入信すると、彼の父親は激怒しタサーがキリスト教徒となることを妨害しようとした [HTG 1851: 119]。

このようにキリスト教世界観や新たなスゴー・カレン語彙の広がりには限定的であった。しかし、改宗者やキリスト教に引き付けられた者の間では、理解できない語彙を用いた不可思議な語りは人知を超越し神秘性を備えた聖なるものとして受け止められた。このことが聖書翻訳を契機として生じていった点を踏まえると、カレン語世界における文字文化は、ある種の聖性を帯びながら、特定の信仰と密接に登場していったと理解することができる。こうした様相には、今村が論じる俗語が聖性を帯びるという現象の一端が表れているといえそうである [今村 2019: 79]。ただし、この点の精密な実証は筆者の手元にある史料だけでは難しい。新たな史料発掘に努めるとともに今後の研究の発展に期したい。

VII おわりに

本稿は、19世紀前半のカレン宣教について同時代史料の分析を基に、東南アジア大陸部の少数派への近代プロテスタント宣教の影響を検討した。宣教師による文字創案以降の動態として、聖書翻訳がすすむなかで従前には存在しなかったキリスト教的スゴー・カレン語彙が誕生し、説教という語りの場で活用された様子を跡付けた。この新たな語彙体系は、初めて耳にし

45) 仏教徒カレン語話者の間では、ブッダとその教えを唯一とする仏教共同体が形成されていたため、キリスト教の神が優位性を確立することはそもそも困難であった [Keyes 1993: 271-276]。

た者やそれを学んだことがない者には即座に理解できない表現技法であった。キリスト教的世界観を表現するための新たな技法が説教という伝道の場面でも活用され、それまでとは異なる画一的な語りが生まれていった。口伝を主なコミュニケーション方法とし、流動的で多様な語りが常態であったカレン語世界に、固定的かつ限定的な語り方が登場したのである。

とはいえ、このことはカレン語世界全体における語り画一化したことを意味しない。大多数のカレン語話者はキリスト教的語りの内容を理解できなかった。使用された語彙や表現、語りの文脈が全く共有されていなかったためである。こうして、伝道における話し手と聞き手の間には齟齬が生まれ、その結果理解不可能で不可思議な語りが存在することになった。カレン語世界に文字文化が登場したことで、オラリティを含んだコミュニケーション上で境界が生じたのである。それを基に複数のネットワークの形成がすすんだとすれば、プロテスタンティズムはカレン語世界をより複雑化していったとも考えられる。

こうした状況が生み出されていった影響の一つとして、プロテスタンティズム的価値観の導入による混乱がカレン信徒の一部でみられた。聖書の内容を正しく理解し伝えるという宣教使命は、印刷物が不足し聖書の全てを聞いたこともないカレン伝道師に自己に対する不安を与え続けることになった。そして、文字の聖性を認めず各地域言語の活用を奨励したプロテスタンティズムが、19世紀前半のカレン世界に信仰と不可分に結びついた聖なる文字を実在化させることになったという見取り図も提示した。プロテスタンティズムが否定した言語の宗教的権威を、カレン宣教活動そのものが生成し強めていくことになった。その神聖性や聖なる文字の正当性は、呪性を持つ書物が伝道の場で実際に提示されることで担保された。こうした点を踏まえ、カレン世界における文字文化は、その歴史の初めから特定の信仰と分かち難い状態で登場したと考察した。文字文化と信仰の不可分性は、文字や正書法とともに生成された表現技法や語彙などが総合的に活用されることで強化されていったと考えられる。

このことは、その後の諸種のカレン諸語の文字と正書法がそれぞれ信仰と深く結びついていったことと無関係でないと筆者は考えている。19世紀以降に形成されたカレン識字ネットワークの細分化が、特定の信仰と分かち難く展開していったためである。それぞれ正書法コミュニティ内では語彙や表現法もある程度画一化がすすむが、全体では複数のカレン文字文化が成立し併存することで多極化していった。その結果、使用する文字や語彙表現の差異が帰属する宗教コミュニティの違いをそのまま示すこととなった。推測の域を出るものではないが、このことは、多様なサブグループを含むカレン語話者間での民族的紐帯や共同体意識が不均一であることとも関連する可能性がある。近代性を象徴する印刷技術を駆使した文字文化の導入は、プロテスタンティズムが忌避した文字の宗教的権威をより強化していくという逆説的動態を生み出し、文字と宗教の親和性を高めつつ、その差異も明示化させていったのである。

出版物

- Cannell, Fenella. 2006. Reading as Gift and Writing as Theft. In *The Anthropology of Christianity*, edited by Fenella Cannell, pp. 134–162. Durham: Duke University Press.
- Hayami, Yoko. 1996. Karen Tradition According to Christ or Buddha: The Implication of Multiple Reinterpretations for a Minority Ethnic Group in Thailand. *Journal of Southeast Asian Studies* 27 (2): 334–349.
- . 2004. *Between Hills and Plains: Power and Practice in Socio-Religious Dynamics among Karen*. Kyoto: Kyoto University Press.
- . 2018. Karen Culture of Evangelism and Early Baptist Mission in Nineteenth Century Burma. *Social Sciences and Missions* 31: 251–283.
- Hovemyr, Anders P. 1989. *In Search of the Karen King: A Study in Karen Identity with Special Reference to 19th Century Karen Conversion in Northern Thailand*. Uppsala: Studia Missionalia Upsaliensia.
- Kau Too, Sau; and Wade, Jonathan, eds. 1847. *Thesaurus of Karen Knowledge, Comprising Traditions, Legends or Fables, Poetry, Customs, Superstitions, Demonology, Therapeutics, etc.* Cephas Bennett revised in 1915, Vol. 1. Tavoy: Karen Mission Press (Reprint: Karen Publication Committee, Dawei, 2001). (Sgaw Karen)
- . 1848. *Thesaurus of Karen Knowledge, Comprising Traditions, Legends or Fables, Poetry, Customs, Superstitions, Demonology, Therapeutics, etc.* Cephas Bennett revised in 1915, Vol. 2. Tavoy: Karen Mission Press (Reprint: Karen Publication Committee, Dawei, 2001). (Sgaw Karen)
- . 1849. *Thesaurus of Karen Knowledge, Comprising Traditions, Legends or Fables, Poetry, Customs, Superstitions, Demonology, Therapeutics, etc.* Cephas Bennett revised in 1915, Vol. 3. Tavoy: Karen Mission Press (Reprint: Karen Publication Committee, Dawei, 2001). (Sgaw Karen)
- . 1850. *Thesaurus of Karen Knowledge, Comprising Traditions, Legends or Fables, Poetry, Customs, Superstitions, Demonology, Therapeutics, etc.* Cephas Bennett revised in 1915, Vol. 4. Tavoy: Karen Mission Press (Reprint: Karen Publication Committee, Dawei, 2001). (Sgaw Karen)
- Keane, Webb. 2002. Sincerity, “Modernity,” and the Protestants. *Cultural Anthropology* 17 (1): 65–92.
- . 2007. *Christian Moderns: Freedom and Fetish in the Mission Encounter*. Berkeley: University of California Press.
- Keyes, Charles F. 1993. Why the Thai Are Not Christians: Buddhist and Christian Conversion in Thailand. In *Conversion to Christianity: Historical and Anthropological Perspectives on a Great Transformation*, edited by Robert W. Hefner, pp. 259–283. Berkeley: University of California Press.
- . 1996. Being Protestant Christians in Southeast Asian Worlds. *Journal of Southeast Asian Studies* 27(2): 280–292.
- Marshall, Harry Ignatius. 1922. *The Karen People of Burma: A Study in Anthropology and Ethnology*. Columbus: Ohio University.
- Mason, Francis. 1843. *The Karen Apostle: Or, Memoir of Ko Thah-Byu, the First Karen Convert, with Notices concerning His Nation*. Boston: Gould, Kendall and Lincoln.
- . 1846. *Synopsis of a Grammar of the Karen Language, Embracing Both Dialects, Sgau and Pgho, or Sho*. Tavoy: Karen Mission Press. (English, Sgaw Karen, and Pwo Karen)
- . 1853. *The New Testament, of Our Lord and Saviour Jesus Christ in Sgau Karen*. Tavoy: Karen Mission Press. (Sgaw Karen)
- Ngo, Tam T. T. 2016. *The New Way: Protestantism and the Hmong in Vietnam*. Seattle: University of Washington Press.
- Rafael, Vicente L. 1993. *Contracting Colonialism: Translation and Christian Conversion in Tagalog Society under Early Spanish Rule*. Durham and London: Duke University Press.
- Rajah, Ananda. 2002. A ‘Nation of Intent’ in Burma: Karen Ethno-nationalism, Nationalism, and Narration of Nation. *The Pacific Review* 15(4): 517–537.
- . 2008. *Remaining Karen: A Study of Cultural Reproduction and the Maintenance of Identity*. Canberra: ANU Press.
- Renard, Ronald D. 1988. Minorities in Burmese History. In *Ethnic Conflict in Buddhist Societies Sri Lanka, Thailand and Burma*, edited by K. M. de Silva, Pensri Duke, Ellen S. Goldberg, and Nathan Katz, pp. 77–91. London: Westview Press.
- Smeaton, Donald Mackenzie. 1887. *The Loyal Karen of Burma*. London: K Paul, Trench & co.
- Stern, Theodore. 1968. Ariya and the Golden Book: A Millenarian Buddhist Sect among the Karen. *The Journal*

- of Asian Studies* 27(2): 297–328.
- Tapp, Nicholas. 1989. The Impact of Missionary Christianity upon Marginalized Ethnic Minorities: The Case of the Hmong. *Journal of Southeast Asian Studies* 20(1): 70–95.
- Van der Veer, Peter, ed. 1996. *Conversion to Modernities: The Globalization of Christianity*. New York: Routledge.
- Wade, Jonathan. 1849. *A Vocabulary of the Sgau Karen Language*. Tavoy: Karen Mission Press. (Sgaw Karen)
- Womack, William. 2005. Literate Networks and the Production of Sgaw and Pwo Karen Writing in Burma, c. 1830–1930. Doctoral Dissertation at School of Oriental and African Studies, University of London.

(2019年11月11日 掲載決定)